CHIKA EDANAMI

枝並千花のこれまでそしてこれから

幼少期にミュージカル「ミス・サイゴン」を観劇したことをきっかけに「私は絶対に舞台人になる!」と、舞台に立つことに憧れを抱いたという枝並千花さん。千花さんの音はしばしば「歌っているよう」と表現されます。千花さんが夢に描いているクラシック音楽の世界とは「今夜ごはんに行こう!」と気軽に誘うように「演奏会に行こう!」と誘える世界。演奏会に来てくださったお客さまが「楽しめた!」と思って帰ってもらうことが大切だとお話下さいました。どうしたらお客さまに楽しんでもらえるだろうかと常に考え、中心に立って渦を作っていくパワフルなプロデューサーであり、華やかなプレイヤーでもある千花さん。彼女のジャンルレスな音楽活動は今日まで真っ直ぐにクラシックと向き合い作り上げた説得力という確かな土台があるからこそというのがお話をきいていて強くわかりました。しかし軸をクラシック音楽に置き「戻る場所」と決め、「下手ではシャレにならない」と誰よりもご自身にプレッシャーをかけて作り上げてきた全ての経験が今日私たちを夢中にさせる企画や演奏につながっているのだと思います。

絵と文 Sumire Akasaka

← ミュージカルは今でも大好き!

新潟県出身。ご両親、そして祖父母共に音楽家ではなかった千花さんがヴァイオリンをはじめることになったきっかけは意外なところからでした。

なんと…

クラシック音楽好き!

お父さまが飲み屋でヴァイオリニスト奥村和雄さんのお兄さんとたまたま隣の席になったことから話ははじまります。

この時先生はまだご自身のお家も決まっていなかったタイミング。お住まいが決まるまではと千花さんの家が教室に!

歌うのが大好き!→

4歳

そしてあれよあれよと生徒第1号に。

当時のことは覚えていますか?

ヴァイオリンをはじめた時の記憶は4歳だったというのもあってほとんどなくて…気がついたらはじめていたという感じだったなあ

ご両親ともに、千花さんをプロにさせよう!という空気はなく、習い事の1つとしてヴァイオリンをしているという感覚だったそうです。

当たり前のようにやってきました。

アムステルダム・コンセルトヘボウ管弦楽団の(現 ロイヤル・コンセルトヘボウ管弦楽団)ヴァイオリン奏者も務められた奥村先生が帰ってくる(先生は新潟のご出身)という情報を先生のお兄さまからきき、「うちで何か生徒を集めてレッスンをはじめましょう!」と提案!

すごい!!そんな出会いからはじまったとは!

そうして習い事の1つとして続けていたヴァイオリン、小学校3年生の時に受けたコンクールで賞をもらったのをきっかけに奥村先生が東京にいらした辰巳明子先生を紹介して下さり、小学4年生の時はじめて全日本学生音楽コンクールを受けに東京へ行き、辰巳先生のレッスンを受けるようになります。

~中学2年生になり、進路のことも少しずつ考えはじめるようになっていたある日のこと~

自分のヴァイオリンに対する気づきもあり、音楽の道へと高校は進むことに

受験のためのソルフェージュ・音楽理論 猛勉強中の

中学3年生では、全日本学生音楽コンクール 優勝

というのも泣きながら千花さんが電話をしたので、「ああ…賞までいかなかったのね」とお母さまは思い、そこからの1位だったのでこの言葉が。

自分も家族も衝撃!!

この優勝は明らかな転機となったそう。1位をいただけるというのは初めての経験でした。

15歳から一人暮らし!!すごい…

桐朋女子高等学校音楽科へ入学

その後桐朋学園大学音楽学部へ

4:30に起床し始発で学校へ
8:00まで朝の自主練、授業後も22:00まで練習、帰って家で練習と
ひたすら練習&コンクールの日々でした。

大学ではオーケストラの授業が充実しており、その中でコンサートマスターを受け持つ機会も多くありやりがいも感じていました。

練習、練習、…、そして国内外のコンクールという日々をずっと続けていた千花さん。18歳の頃、腱鞘炎で手がうごかなくなってしまいました。

気が付くと国内でコンクールに出ることが怖くなってしまったのだそう。

そんな中で何かったロシアでのコンクール、痛み止めを飲みながら手を動かして出場しましたが二次予選で手が限界になり日本へ戻ったことも。

この道をやめるかどうかを考えるまでだったといいます。手は痛いし、精神的にもツラいですね…

2003年、イタリアで開催された第24回ミケランジェロ・アバド国際ヴァイオリンコンクールに出場

すっごく自由に弾けて、結果も関係なく、こういう気持ちが戻れば「また人前で弾けるかな」と思ったんです。

誰も私のことを知らないところで弾きたい!

コンクールへの挑戦を続けるエネルギーとチャンスを頂き何年もサポートし続けてくださったもクマの恩師、辰巳先生に心から感謝しています。

すると結果は優勝

終~ビューティフル

その時千花さんの頭の中は

東響での日々はどうでしたか?—思い出ばかりです

オケのみなさんがすごくあたたかくてかわいがってもらいました。忙しいオケでしたけど主要な作品を含め、オペラやバレエの曲も出来て、沢山の曲を勉強できた時間でした。

とにかくコンクールを受け多学生生活だったためあまり外に出ることがなかったそう。なのでみんなで外にごはんへ行くといった普通のことが一つひとつ楽しかったといいます。

2009年末 退団、

その後はソリスト、室内楽奏者、コンサートマスターと幅広く活動の輪を広げていきます。

日本フィルハーモニー交響楽団、東京フィルハーモニー交響楽団、東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団等へゲストコンサートマスターとして招かれ、宮崎国際音楽祭、ラ・フォル・ジュルネ、東京春音楽祭などへも出演

退団にはどういった想いがあったのですか?

自分で人を集めて企画をすることに興味がありました。さらに学生時代からクラシック以外のジャンルのことにも興味がありましたが、やるにしても軸足はクラシックに置くというのが大前提!と思っていました。やりたいなと思っていたいろいろなことを、腱鞘炎になり一旦置いておいたが手も良くなってきて、挑戦してもいいのかな?!という考えが芽生えてきて、飛び出すなら早い方がいいはず!と退団を決めました。

右のページへ!

時系列に沿って師と千花さんのお話をきいていたので"すこし話はそれますが…

MD Music Dialogueとの出会いのきっかけはどこだったんでしょう?

MDの芸術監督・大山平一郎先生にはシャネルの室内楽シリーズで出会いました。そして2014年、Music Dialogueを立ち上げるとなった時に声をかけていただきました。大山先生のことは信頼しきっているので、質問などはまったくせず、先生が考えていることで私を入れていただけるのならぜひ!!とふたつ返事でMDアーティストにカロわりました。

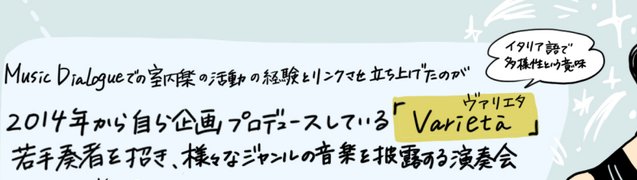
室内楽は同じ方向性を向くことができるメンバーで行うと、作品に対してより広く深く表現を探求できます。

室内楽の経験が圧倒的に少なかった私にとってはMDのすばらしいアーティストと共に演奏することは毎回が貴重な機会でした。

話は戻り、フリーになってクラシックのお仕事と並行して、

海外のアーティストのオーケストラのコンサートマスターの仕事が続けて入るように

→ 2CELLOS, イディナ・メンゼル, イル・ディーヴォ等



「オーケストラポッシブル」「ヴァリエタ」の活動につながっていったんですね。

その中で、コンマスだけではなく他のメンバーも集めてくれない?という依頼も増え、自分も信頼のおける演奏家たちを集めたいと思って声かけもするように。

「人を集める」みたいなことが千花さんの中でおもしろくなっていきました。← 仲間を増やしていくという感覚だそう。

2009年にはデビューCD「夢のあとに」をリリース
2014年、ブルーノ・ワルターのヴァイオリンソナタが日本初録音された2ndアルバム「naked」をリリース、2016年には今までの活動の履歴となるような3rdアルバム「LOTUS」をリリースしました。

様々な音楽に取り組み、仲間を増やしてきた千花さん、2018年には自らのチームである「オーケストラ・ポッシブル」を立ち上げます。

クラシックからミュージカルそしてドラマの曲まで!
ジャンルレスに多様な音楽をテーマごとに演奏します。

Music Dialogueでの室内楽の活動の経験とリンクさせ立ち上げたのが

イタリア語で多様性という意味

2014年から自ら企画プロデュースしている「Varietà(ヴァリエタ)」

若手奏者を招き、様々なジャンルの音楽を披露する演奏会

その時に必ず「最後の曲はクラシック以外を選んでね」と提案をするそう。

"表現するということは一緒なのだから、ジャンルを分けて考えて欲しくない"というのがあって。

クラシック界はコアなファンの方がいらっしゃってとてもすばらしいことなのですが、はじめまして、という方への入り口ももっと大きく開いていたい。クラシックを弾く場を維持するためにも、お客さまが求める音楽がクラシック以外だったらそれも弾くべきだと思っているし、お客様の層を演奏家1人1人が広げていかないとクラシックの世界はより狭くなってしまう。どうすればいいのか?という想いを昔から持っていました。だからといってポップスの仕事ばかりしても説得力がないので、クラシックもポップスも、どっちもできてどっちも発信している、というようにどちらも弾ける演奏家に私はなりたいと思って活動してきたし、そういう考えの仲間が増えるといいな。という気持ちがありました。

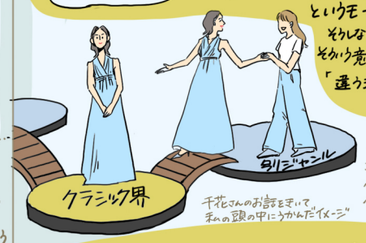
例えば…

レ・ミゼラブルを弾くなら行ってみたいな。

そういうお客さまを1人でも増やしていく。「とにかく1人でもお客さまを集めよう」というモードがあってもいい!

そうしないとお客さまは増えない

そういう意味でも、「違うジャンルも弾こうよ」という感じで言葉をしています。



クラシック界にしっかりと立ちながら異なるジャンルからも人がアクセスしやすい橋を千花さんは作られているんですね!

千花さんのお話をきいて私の頭の中にうかんだイメージ

2018.6月 初公演は「音楽は心のくすり」をテーマに医療ドラマ8作品から12曲をフルオーケストラで演奏

この公演の映像はコロナ禍にYouTube公式チャンネル「枝並千花CHANNEL」で無償公開され1,600万PVを超える反響が!!

今もなみ→ふえつづけています。

オーケストラのメンバーを集める中で嬉しかったのは「詳細が決まっていない状況でも、千花ちゃんがやりたいことなら一緒にやろう」と快く協奏をしてくれる仲間が多くいたこと。長年プレゼンにやってきてクラシックに軸足をおいてきたから今のメンバーが集まってくれたのだと思います。連絡をとりながら1回1回動いていました。

プロデューサーの一面もある千花さんの生み出す楽しい音楽の場にはこんなものも!

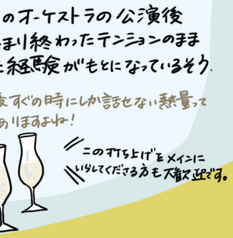
定期的に開催されている千花さん主催のステージでは、演奏後に来場者と乾杯する。つまり一緒に飲む時間がもうけられているのです!

演奏会 と お酒の席 ハッピーセットだ!

桐朋学園のオーケストラの公演後メンバーで集まり終わったテンションのまま皆で話していた経験がもとになっているそう。

演奏後すぐの時にしか話せない熱量って必ずありますよね!

同じ音楽を共有したみんなで楽しくおしゃべりすることは次のステージの原動力となっています。



この打ち上げをメインにパルてくださる方も大歓迎です。

これから に向けて

学生時代から思いつづけていた音楽のジャンルにとらわれない活動のためどんな仕事がきても自分の役割と仕事をしっかりとこなすにはキャリアが必要不可欠と思い、アーティストとしての土台を築いていった20代、30代。40代になり次第に後輩、そして仲間がさらに増えてきました。今の千花さんの活動の軸でもある「ヴァリエタ」と「オーケストラポッシブル」。オーケストラ・ポッシブルについてはもっと結束力の強い団体にしていきたいと思い動いている最中だといいます。私の考えに共感しオーケストラ・ポッシブルに出たい!とアーティストたちに思ってもらえるような団体になっていくように、「私と弾きたい!」というよりは「みんなと一緒に弾きたい」と思えるオーケストラにしていきたい。と情熱を注いでいる千花さん。

今はまだ理想の途中ですが、こうしたい、そうなったらいいなと思って続けてきたことで自然とお客さまの方から近づいてきてくださり、ファンが増えていたそうです。

「この曲を弾きます」と言わなくても「千花ちゃん出るの?!行く行くー!」と集まって公演に来て下さったり、自分のコンサートの中で知り合ったという方々が別の場所での公演に誘い合って来てくれた事もあり、その時、自分が思い描いたものが形になったようでうれしかったです。

より自由に独自の世界を仲間と共に極めていきたいです。

インタビュー:2025年1月末日